こしかやの花

輪廻の巻

前篇

業（前號のつゞき）……一
末那識……七
阿賴耶識略說……八
生死輪廻……一〇
十如……一七

後篇

蓮師本尊說……二一
佛……二七
本尊……二九

附錄

上人の追憶……三三

業

（註。前月のつゞき）

業とは梵語羯磨と云ふ。業作と熟字し、シワザ又はハタラキのことなり。心界にて云へば見る聞く考ふ知る等皆このワザ、ハタラキならざるはなし。身にて云へば打つ蹴る斬る引く等、口にて言へば話す語る詐る欺く等みな人のワザ、ハタラキならざるはなし。吾人一生の中諸種の活動をなす中に於て、殊に烈しく外界に影響を及ぼし、即ち自己に活動したる心的もしくは身體の作用が他人に影響し社會に影響を及ぼしたる善性のもの惡性のもの、何れにせよ、その活力の强かりしものは、その力永久に滅せずして存在するものとす。佛敎に於て業因緣と稱するもの即是なり。

善性のものを白業と名け、惡性のものを黑業と名くなり。この惡の黑業善の白業等を起す本體は果して何物なりやと云ふに、思と名くる精神作用と肉身と口となり。名けて三業と云ふ。所謂身口意の三業と稱するもの是れなり。身口の二業は物質的なれ

一

ども意業に至りては全く精神的なり。思ふと云ふ思の作用は全く意識に屬すれども、精神作用の一種なれば思業と云ふ可きを、その根本に還して呼んで意業とす。而も物質的の身口二業は假りに業の體となるのみにして、その實體を論ずる時はやはり意業に歸せざるべからず。されば諸種の業の根本たるべきものは畢竟業の一種なりと云ふべし。

されば業論に於て尤も研究すべきは意識の作用たる思と云へるものなり。

但し小乘有部派に於ては特異の點は是等の思及び思所作より作りし業を以て一の無表色と名づくる特種の存在物とす。換言すれば見るべからず觸るべからざる實體なり。世親菩薩の有部派を發揮せる倶舍論に於て、殊に業品の一段を設けて、その意義を說明せられたり。その最初の偈文に曰く、

世の別は業に由つて生ず、思及び思の所作なり、思は即是れ意業、所作は謂く身語なりと。

是れ即ち業を以て一切萬物生起の原因とせるものにして、世別由業の一句まさしく予が業を以て有部派靈魂不滅を說明する根基となす所以なり。

無明の說。

無明とは遮詮、即ち消極的の語にして、正言すれば全く煩惱なり。恰も惡妻子を有する人を名けて無妻子と稱する如く、無明と云へばとて物體の虛無を顯すにあらずして、全く明即知識の惡方面に向ふて動くとき名けて無明と稱するなり。無明は何故に殊に表出する必要ありやと云ふに、業を作りて吾人をして汲井輪の如く輪廻無窮ならしむるものは、全くその原因この無明にありとす。例を以て言はゞ、業は種子なり、無明は雨露水土なり。業の種子ありとも無明の雨露水土を以て之れを養成するなくんば、業なるもの全く莖幹枝葉を發生して、果實を結ふ能はざるべし。

倶舍論に隨眠品の一段を設けて、煩惱につきて委細に辨明の辭を費すもの全く是の必要あるに由るなり。

二

三

得非得の說。

得非得と云ふことは倶舍論中に於て、古來有名なる問題にして、六因四緣のもつれいと得非得のうす霞なぞと稱し、尤も難問題として知られたり。一言にて之れを云へば、得とは我所有として自己一身にくゝりつけ置く紐の如き作用を指すものにして、物質的にもあらず、精神的にもあらず、一種の力なり。例せば一度强き惡業を作るときは、三世に渡りて自己の一身內にその業を所有せしむる一の勢力なり。非得とはこの反對にして自己一身より離れ除かしむる一の勢力なり。有部派に於てはかゝる得非得なるものありて、實に存在するものとす。但し他の小乘派は多く假說とす。

命根の說。

命根とは人間の壽命なり。十年二十年乃至五十年百年人間をして社會に存在せしむる一の勢力にして、物界心界の中に在りて別にかゝるものありとするは有部派なり。倶舍論に佛說を引きて云く、

壽と煖と及び識と三法が身を捨つるとき捨てられたる身は僵れ、仆る木の如にして思覺なし。即ち人の生命を保持するに、煖即體溫と識即精神と、壽即命根との三物互に相維持するに依るものとす。然るに經部派の說に依るときは、人間をして是の世に住せしむる業の勢力を以て命根の體とし、業勢力以外に更らに命根とか壽命なるものなしと云へり。予輩が業論として小乘の靈魂論を記せんとするには、是の經部の說を以て尤も合理の說なることを認む。

小乘有部に於ける人生の解釋稍々其要領を得べしと信ず。要を擧げて是れを云はば天地間に於て吾人の見聞し思考し得べき時間と空間なる者は、倶に實體ありて存在す。而も時間空間の經緯中に存在する物界心界の二元は倶に實有なり。永久不滅なり。物質不滅の理はまさに物界の實有を知るべく、勢力不滅の理はまた心界の不滅を想見し得べし。而もこの物心兩界をして相調和し合一して活動せしむる根本原理は業なり。業とは心界中にありて尤も偉大猛烈の作用を有する意識より作られし一物體なり。苟くも是の業の存在する以上は未來決して無と云ふべからず。たとひ今日の我が一身を組織する肉體及精神は無常の風にさそはれて烏部野一片の煙と化し去るとも、業即ち今日の我等が一生中に活動せし痕迹の潛勢力が不滅なるうへには、未來に於て再びこの業の勢力に依りて新らしき肉體と精神とを集合す。小乘有部派に於て若し意識的の靈魂を永久に存在すべしとせば、是の業の連鎖とし、唯一の保存物とせざる可からず。物質的の肉體は刹那生滅と云ひ、一刻一刻に變化しつゝ死の時に壞滅すべし。(元素は存在するも)

心界の作用もまた刹那生滅の原理を免れずして、死の時肉體と倶と滅し去るべし。(或は精神だけはその儘に來世へ飛び去る如く考へるものあれども、予は佛敎の眞理を發揮せん爲めには、かく語るを以て至當と認む。業の勢力に依り前に滅せし意識と因果關係ある新らしき意識が後の來世に起るなり。)

さらば死後獨り止まりて更らに新らしき生命を續くるものは生前に於ける活動にして、社會萬般の事物に印象を刻せし勢力たる一の不思議力なる業あり。是の業よく我等をして或は苦しき處に或は樂しき處に其性質の善惡に隨ひ因果の理法によりて新らしき身體を結ばしむ。是れ實に小乘有部派に於ける業論の大意なり。但だ注意すべきは、是の有部派に於ては他の大乘佛敎に異りて、或る方法によりて業さへ滅し去らば未來の生命を斷絕し靈魂を滅せしむることを得るとすること是なり。是等の說は……

末那識

末那識の如きは迷界中に在りて常住不斷存在を說けども、其性質たるたゞ第八識に對して「我」なりといふ執着を以て特性とするまでにして、其他には更らに廣大なる作用あることなし。約言すれば第六識と第八阿賴耶との關係を繫ぐ所の連鎖たるのみ。壽命を持ち暖き溫度を持ち身體を生新ならしめ意識を發現する唯一の根源は全く微細不可思議の阿賴耶。阿陀那識は甚だ深細なり我れ凡と愚とのためには開演せず。

阿賴耶識略說

小乘有部派にては業を以て生死輪回の基礎となせども、業の所有につきて之を苦みて遂に得非得と云ふ繩の如き實在物を作成しその教義の不備を補はんとせしが、實際に於てかくの如き說は人をして滿足せしむべくもあらず。業の說は佛教全體に渡りて動かすべからざる教理なりと雖も、業住家につきては身心共に暫現的のものたる上は、身若しくは心の休息せし時、業は浮浪人の如く住むべき家なきものたらんとす。されば小乘教中尤も發達せりと稱せらるゝ經部派にては、業を以て種子と名け（勢力の潛伏に同じ）色心互持說の如き立論を爲すに至れり。色心互持とは前に云へる如く身の休息する時は心この種子を持ち、心の休息せるときは肉身に於て之れを持つゆへ、浮浪人の如き苦境に陷ることなしと說けるものなれど、是れとて左程完全なる說とは思考し難し。浮浪人の例を以て之れを言ふも尙また食客的境遇によるものにして、儼然たる一家を所有する公民と稱すべからざるが如し。或は肉身の家に在るかと思へば忽ちにして心の家に在り、心の家の事情によりては又忽ちにして身の家に歸ると云ふ如きは、未だ以て完全に人生問題に對し滿足を與ふるものにあらず。寧ろ此色心互持說よりも細意識說を以て勝義我を主張する經部の新派はその說未だ詳密ならずと雖も勝る所あるが如し。

兎に角無始の曠古より曾て滅したるなく一味相續せる心的一物體ありとすること、靈魂不滅說としては誠に完全なるものと云ふべし。

唯識論に於ては阿賴耶の外に更らに末那識と云ふものを說けるは、畢竟第六意識と第八阿賴耶との中間に在りて、是れが媒介者たる職分を有せるものにして、心の植本は固より阿賴耶識なり。

因に一言すべきは末那と言ふ名にして梵語の末那は譯して意と云ふ。若し譯名を擧ぐれば意識と全く同名なり。唯識論の如く意字を以て思量の義とするときは、第七識を以て無始時代以來暫くも休息することなく、第八阿賴耶を對境として「是れ我なり」との自我の思ひを起しつゝあるものなれば（意識的に明了に知るものにあらざれど微細にこの觀念存在するものなり）意の字の意味や却て末那識の領分にして、第六意識は畢竟この末那識が起しつゝある自我常住觀念を基礎として活動するものなれば末那識の御蔭を以て意識と云ふ名を有し居ると云ふ可きなり。

されば是等八識の語義より考へて第七識は意識の尤も微細なるものと云ふことが考へ得らるべし。

生死輪廻

唯識論に曰く、

內識ありと雖而も外緣なくんば何に由てか有情の生死相續する。頌に曰く、

諸の業の習氣と二取の習氣と俱なるに由て前の異熟既に盡れば復た餘の異熟を生ず。

是の意は業習氣と二取習氣との勢力一身內にありて保存せらるゝ故、たとひこの身體は絕滅すとも、再び新らしき身體を造ると云ふことにて、

業習氣とは全く猛烈なる善惡の意識作用にして、其作用は瞬時に滅して迹なしと雖も、阿賴耶の內に後來活動を再現すべき勢力を薰習す。之を業習氣と云ふなり。

二取習氣と云ふは、略言すれば、個々別々に自己を生ずべき勢力にして、親しき自己の原因なれども、勢力弱きゆへ、但だに是れのみにては結果を生ずる能はず、非とも業習氣の補助引導を待ちて、初めて自己再現の活動を起すを得るなり。二取と云ふ名は執着すると執着せらるゝと云ふ程の意味にして、見るものを能取と云ひ、見らるゝものを所取と云ひ、專門に研究する時は重々の意味あれども、今は但だ實體ある各個の存在を指すものとすべし。我執習氣は但だ能作因の如き作用をなす者なるゆへ二取の中にあれども今は之れを省きて云ふものと知るべし）

例せば、阿賴耶識は自分の種子(二種習氣)より生起するものなれども、その勢力薄弱にして到底自己のみの種子にて根芽發生する能はず、是の時に當りて之れを助け之れを導きて再現作用をなさしむるものは業習氣なり。

要するに阿賴耶は人間にありても畜生にありても地獄餓鬼天人何れにありても無垢なる無記性なり。

人間の阿賴耶たらしむるか畜生の阿賴耶たらしむるかは、責任獨り懸りて業種子の双肩にありと稱すべし。而も業種子なるものは、その根本全く意識作用の上に發動せる行爲に在るものなれば、自己の行爲及び意志の勢力全く生死相續の全權を握り、善行爲は善處に生れしむ、惡行爲は惡處に生れしむるものなる故、是等の教義は全く倫理上の基礎の上に立つものと云ふ可し。餘談は之れを措き習氣に就て之れを詳かに云ふときは三種ありとす。左の如し。

一、名言習氣。名は言に顯る。畢竟萬相は名言即ち名目に依りて心之れを寫象し、よく種子を作る。心なくんば種子を作る能はず。此中正しく他の名目に對して薫習せるものを表義名言を名け、其外境を分別する認識作用(見分)を顯境名言と名く。

二種俱に親しき各個實體あるもの、爲めに原因となる。有部派の同類因に同じ。

二、我執習氣。まさしく自己と他人とを區別し、欲望等諸種の煩惱を生ずる本たり。之れを增上緣と名く。有部派の能作因なり。

三、有支習氣。有とは天界人界等の大體を總稱する語にして、善は天及び人の果報を招き惡は非可愛の苦しき果報を招く。全く業習氣なり。有部に於ける異熟因なり。

是の三種前の頌文に出てたる業習氣と二取習氣に配當すれば左の如し。

- 業習氣
  - 有支習氣
    - 善
    - 不善(惡)
- 二取習氣
  - 表
    - 名言習氣
      - 義
      - 境
      - 生
      - 別
    - 顯
    - 俱
  - 分
    - 我執習氣
      - 疎緣—異熟因
      - 親因—同類因
      - 疎緣—能作因

右の如く例を阿賴耶に取つて言へばその親しき原因は名言習氣なり。之れを助くる疎緣は我執と有支となり。同じ疎緣と云へど、有支即ち業習氣は非常なる勢力を有し、白き紙を染るは黑又は赤何れにても爲し得る如く、地獄たらしむるも極樂たらしむるも業そのものゝ勢力にして、根本の心は阿賴耶なれど、猛烈偉大の活動は獨り意識(第六)の專有に屬すと云ふべし。換言すれば生死輪廻の本體は阿賴耶なれども、生死輪廻せしむる根本は業習氣なりと知るべし。又是に就いて惑業苦三道の說なり。十二因緣につきて之れを表せば左の如し。

- 一、無明
- 二、行
- 三、識
- 四、名色
- 五、六處
- 六、觸
- 七、受
- 八、愛
- 九、取
- 十、有
- 十一、生
- 十二、老死

一、無明～二、行：能引支(正しく業種子なり)

五、六處～七、受：所引支(業種子に助け引かる、本識內の名言種子)

八、愛～十、有：能生支

十一、生～十二、老死：所生支

能引支～能生支：現在世

所生支：未來世

惑業苦の事は有部派の惑業事と同じ。但だ十二因緣を以て十因二果とし、二世一重の因果とすることは有部派と異れり。唯識宗にては二世一重の因果にて充分生死輪廻汲井輪の如く始なく終りなき迷界の事を推知し得べきが故に、別に三世に渡りて之れを論ずるの必要なしとするなり。

因に十二の開合を論するに、九は實に依りて設け、三は假りに作りしものとす。表すれば左の如し。

（實體に名く）　　（假りに設く）

無明——（煩惱のこと）

行——（業種のこと）

識
名色
六處
觸
受
愛——（煩惱の名）
取——（煩惱の名）

（この五、總して云へば五蘊のことなり）

生（五蘊の時間上に於ける假りの名なり）

老（同上）

有（行の種子及び五蘊の種子が正さに未來の果を起さんとする時に假りに有と名く）

（註。前月號生死の卷靈魂不滅の證明以下全部及び本月號の以上の部分は其原文の所持者御法弟にして僧林善導寺主なる探旧英亮師の證言と其他の事情を參酌して御自筆を更に筆寫せるものと推定して玆に採錄す）

十　如

佛の成就し給ふ所は第一希有難解の法、唯佛と佛とのみ能く諸法の實相を究盡し給へり。

十如は因果の周徧せる說明なり。

如是相

相とは、以て外に擴る、覽て以て別つべし。譬へば人未だ禍あらざるに、否色已に彰る、相外に覽て別つて能く凶衰を起す如く、凡夫は知らず、二乘は髣髴に知り、菩薩は知ること深からず、佛は知ること邊際を盡し給ふ。

性とは、內に據る、自分改らず、木に火あれば緣にあふて卽ち發するが如し。泥木の像の如き外相ありと雖も、內に生の性なければ、生々する能はず。人天の性は善法、二乘の性は非善非惡、菩薩の性は無漏の慧を性、また中の悲を性とす。佛陀の性は一切智悲誓願を性とす。

體とは、卽ち元質、色心を名づけ體とす。或は唯心を體とするあり、人天の體は平安の色心、二乘菩薩各色心あり。

力とは、功能を力とす。萬法各功能あり。舍を造るに泥木を取り、衣を縫ふに縷を取るが如し。地獄は刀劍に登り、餓鬼は熱鐵を呑み、人天は道義の善をなす器なる如く、佛陀の力とは慈善力を以て迷界の衆生を拔濟す。

作とは、構造經營し、三業を運らして諸の作業をなす。人天は止惡作善、佛界は四弘の大願度生を行とす。

因とは、習因、習慣相續して斷へず、其習慣の發動するによりて、善惡の行爲をなす。人天は善業の習因、佛界は知德莊嚴の因なり。

緣とは、助成機關、卽緣助のみ。其因性を助成して後の習果を喚び起す。水の能く種子を潤して發萠せしむる如く、單に習因のみにて報を生ずる能はず、緣の助を以て結果を引く。人天の緣は善の事情、佛の福德の莊嚴を緣とす。

果とは、習因の果。習慣より引く處の結果なり。樂を好む人は乾達婆に生れ、多婬の人は鴿雀の中に生る。人天は任運に善心に酬ひて生れ、佛は一念相應して大覺朗然の無上菩提を得るなり。

習因は習慣の前に續くを云ふ。習果は後の果を冠得するを云ふ。

報とは、報果。地獄は銅柱鐵床苦、人天は苦樂共受、佛界は大涅槃一切智德圓滿。

果と報とは果とは形式、報は內容、また引業滿業の如し。其因業によりて人天の身を受くるのは果にして苦樂貴賤の內容は報果なり。

本末究竟等とは初の相は本、後の報は末。其歸趣する處を等とす。

佛陀に約して實相を論せば、佛は萬善の緣因を指して相とし、智慧の了因を性とし、實相の正因を體とす。慈善力を力とし、任運無功用を作とす。四十一位を因とし、一切助菩提道を緣とし、妙覺朗然を因圓の冠する處を果とし、大般涅槃を報とす。相よ

り報に至るまで實相の上には本末等一なるを究竟等と云ふ。如來は遍く照して横竪實相を究盡す。凡夫は盲者の如く、二乘は眇目の如く、菩薩は夜視て朦朧として曉らさるが如くなるに止みぬと言を絶つ。

二〇

蓮師本尊說

天臺は法身。理の三身。無始。報（應）身は時間上久遠時節を說くを以て肩目とせり。蓮師は法身實在は價なく、却つて佛陀の眞容と慈悲とを埋沒するの失あり。壽量品の光顯したる眞意は體用具足の上に應用不斷の妙旨を示す。三身即一の應用をのべて塵點久遠の大悲を顯す。

蓮師の意は無始活動の佛陀即ち是本體なり。活動なき理法身の本佛より後に應用を起したるにあらず。天臺の不縱不横は理性の上に立ち修顯の上には前後を立つ。體本用迹の上には無始活動の佛を直ちに本佛とす。活動を一時一世に限る佛陀觀は迹佛に屬し無始無終不斷恒常の大化を認むる佛陀觀は本佛に屬す。而して應用常住の佛陀は三輪を活用しつゝ毫も休止なく意輪は大慈悲に充され慈善根力に積聚せられ大功德力あり。淨用測るべからず。この意輪に功德の力は身輪に和して三世十方縱横無盡の形

二一

體を示し、衆生を度しまた口輪に和して三世十方に周徧無窮の法化を說く、不思議の三輪は化他の大活動をなす。此化他の方も本佛にありては自受の法樂となる。恰も悲母の赤子を愛育するに勞苦の中にまた快樂を感ずるが如し。

本佛は化他を（廢）して自行の（空）中に歸り秘密藏中に隱れて眠れる如きなし。常に衆生の上に淨用を施し止（息）なし。此常恒不斷の大化を極めて圓滿に意識し無始盡十方の感應の中心を本師釋迦佛に決定するを應身常住の妙談とす。

蓮師曰く法華經を信せざる人の前には釋迦佛入滅を取り、此經を信ずる者の前には滅後なりとも佛在世なり。

又曰く、佛の入滅は已に二千餘年を經たり。然りと雖も法華經を信ずる者の許に佛の音聲を留めて時々刻々に念々に我死せざる由を開かしめ給ふ。又曰く、我即是（父）の柔輭の御姿見奉るべきをもまた見奉らず是誠に袂を（ひ）たし胸をこがす、夜な夜なさらんや暮れ行く空の雲の色有明け方の月の光までも心をもよふす思なり。

上人は具體的慈悲應化の常住を信じ且つその常に吾人の頭上を照せるを感じて信念を勵むべきを教へ以て之を報應顯本の妙旨と名づく。

無始の佛は法界の主師親なり。即ち法界を領有し法界を證悟し法界を化益す。法界の群類より塵々法々の末まで佛陀の淨用中に生々化育するものにして、全法界本佛の體用にあらざるなし。本佛常恒に五眼を以て一切を照見し大慈悲の妙化暫くも止息せず。衆生迷うて法界の眞相を知らず本佛の大慈悲中にありて自ら煩惱す。

眞宗では信行安心彌陀に在り。彌陀の悲願を本とす。然るに彌陀の體相を辨ずるに教義確定せず、有相の報身を說くも報身の體相を推究する時は無相の法身に歸し、法身無形を第一體とす。報身の有相を方便身第二身とす。其體相を確立せず。我蓮師獨本佛論を大（　）

佛界緣起

佛界緣起の妙義を究むる時は法界は一大本佛の淨用中に起伏する本佛の淨用は畢竟

二三

大慈悲力の活現に外ならず。慈悲卽ち佛陀の全體にして慈悲卽ち法界なり。

台師は法界は法性の理とす。此理萬法を含むと。上人は法界を大活動大慈悲の……大慈悲の中に理と智を攝す。慈は一切衆生の父母常樂我淨の四德なり。此の四德を台師は法性の理を本とし十界事體を迹とす。十界の中九界の惑より生起を論じ菩薩道に入り法性の理を解し證し妙覺をう如來にして不縱不橫を說くも體用の中體に約して三身並常を說く其の實法身ビルの一本に歸して報應の（　）在を示さず、用は迹、有始とす。

蓮師は理本事迹の說を排し十界事體常住の具有を說き九界緣（生）起を排して佛界起用の法門を說く報應顯本の妙旨を揭げて本門獨得の法門とす。二面には動の法面を表とし無始十方活動と。

台師本無今有無明起感の緣起論。此は佛界化用の緣起論。彼は法性（々）法理具の實體論此は十界常住本具の實體論。

彼は衆生心性因分の佛性論、此は本佛果上妙智（願）の下種論なり。彼は如來（括定聲）の妙能にて止觀の智行を成辨し、此は如來（每自）の悲願を緣して受持の信行を示す。彼は眞如內薰の力を取りて助緣の爲に一體三寶の外護を仰ぎ、此は本佛每自の念願力を取りて感應主となし本佛三輪より起れる自在神力を以て妙法の五字を唱へ受持の三業に感應し。

十界事常の三千佛果起用の三千化他廣事の三千慈悲功德の三千を示す。

台家は法勝人劣。蓮師は人法人（體）信念成佛、

信　念　成　佛

本尊究竟圓慈の淨用每自此念の本願に對して衆生信念を立つ根據なし。法佛は母と乳との如く分離さらるべきに非ず。母の溫き慈愛力用の上に乳房は赤子の口に入る。母には乳あり。本佛には必ず三輪の妙用あり。妙法の乳。信念成佛の要道は三輪の淨用を確信し南無妙經を信念し口稱し臨終を期して修顯得體の成佛を究竟するなり。

妙法蓮華經卽是本尊卽是戒體卽是題目、こゝに一代敎觀の秘奧を收羅し一代敎理行

果の諸法を攝得して餘なし。綜合統一の大主義。

上人は有相信行の旨致を建つ。

松野（勢）に曰く、但在家の身は餘念もなく日夜朝夕南無妙、唱へて最後臨終の時を見させ給へ。妙覺の山に登り四方を御覽ぜよ。法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし金の繩を以て八の道をさかひ天より四種の花ふり虛空に音樂聞へ諸佛菩薩常樂我淨の風にぞよめき給へば我しも必ず其數に列るならん。法華經は斯るいみしき御經にておはします。

有相莊嚴の淨土は實に壽（量）最深秘妙の玄旨より開敷し來る處にして本化獨步の國土（觀）有相信念常行の受持は始終一貫立敎の大綱目開宗の本義。

蓮師は台師の報身有始の顯本說を取らずして、別に報應無始實在の妙旨を光顯す。體用不二法身無始用起の應報何ぞ始あらん。體用不二の上に明す處の淨用不斷の妙旨を信知し。

佛

圓仁安然の十方三世無限の佛陀あるも其實は一佛なりと。

淨土敎（　）法華經に釋尊我外形は到底生死を免れ得べからざる有限者なり。我內實は慧光照無量壽命無數劫と說き彌陀經の壽命光明無量と同じく、釋尊彌陀同一體、兩經所說を對照して（已に）顯著なり。台家に覺運和尙念佛寶（號）論に彌陀を呼びて爲實施權、開權顯實、開迹顯本、久遠實成、垂迹二（無）益物、極樂世界顯密敎主大慈大悲阿彌陀佛。

存覺師六要抄、釋迦佛久遠實壽卽阿彌陀佛之名義也、故法華云、慧光照無量、壽命無數劫、無量光者、佛智觀照之妙用也、無量壽者、法身常住之妙理也、體用不離、理智冥合、釋尊功德全阿彌陀、諸佛功德又以道（同）。

彌陀三身者諸佛通途三身と異り諸佛通途三身は彌陀三身より分出すとの處覺運和尙

久遠實成彌陀佛永異諸經之所說。

口傳抄。久遠實成の彌陀を以て報身如來の本體と定めて之より應迹を垂るゝ諸佛通途の法報應の三身はみな彌陀の化用たることを知るべし。然らば報身と云ふ名言は久遠實成の彌陀に屬して常住法身の體たるべし。通途の三身は彼より開き出す處の淺近の機に趣きし處の作用なり。

大日と云ひ彌陀と云ひ釋迦大覺の前に顯はれたる本覺是なりと云ふ。只有形肉身の釋迦に制せられて無形的精神の釋尊を疑ふこと勿れ。釋迦大覺の前には威風堂々大日如來も存在すれば又彌陀如來も存在するなり。

蓮師十妙。

本因妙。從果向因。我成佛已來甚大久遠。

本果妙。無始實在、慈悲爲本、應用不斷、每自作（　）

迹門始覺十界互具を說き本覺本有十界互具を（顯）さす無始の本佛をしらず。

師は具體的佛陀無始實在を光顯す本果妙

本國土妙。台は寂光理土、此は靈山の事土化他卽自行の主意

本佛三世常化の大悲止息なし、寂光も事土、吾人の往詣同居淨土莊嚴有相

本地の土は三炎を離れ四（劫）を出でたる常住淨土過去も滅せず未來も生せず所化（　）同時。

本感應妙。本地無始報應實在每自大慈の念願絕ゆることなき

持法華問答。何なる時節ありてか每自作是念の悲願を忘れ何なる日ありて無一不成佛の御經を持たさらん。昨日の今日となり去年の今年となることを是期する所の餘命にはあらざるをや。經て過にし方をかぞへて年の積るを知ると雖も今行末に於て一日片時も誰か命の數に入るべき臨終已に今にありとは知りながら我慢偏執名利に著して妙法を唱へさらんこと志の程無下にかひなし。

本　尊

釋尊因行果德の二法妙法蓮華經に具足す我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り給ふなり。

又云く、一念三千を識らざるものの爲に佛大慈悲を起して妙法五字の袋の內に此珠を裹みて末代稚幼の頭に點せしめ給ふ。衆生救濟の活力は正しく本佛大功德力により因行果德の妙法を示し給ふ。妙法は本佛の力たる慈悲力善根力功德力神通力を包籠するものにして信念を煥發すべく。

蓮師の本尊觀は客體的に報應事常住佛陀圓慈を中心とし、形（塵）の上に十界應現の妙用を說き聲塵の上に妙法の具足道を敎ふ。本尊三輪の淨用に本佛の實在を聯（想）し耳に妙法を聞く時そこに本佛の大慈悲を憶念す。因行の萬德果上の萬德我に歸するを確信し以て時々刻々に本尊三輪の妙化に攝護せられたるを感せしめ、こゝに歡喜平和滿足渴仰の心慈悲心等を發し幾多無限の靈應を感得せしむるもの。

若し信念の機卽ち本化の示敎にありては信成就の行人臨終を期して同居の淨土に入りて面奉し上るを得ると（　）る卽ち聖判に唱へて唱へ死しなば須臾のほどに飛び來り手を取りて肩にひきかけ靈山に生し給はんと云ひ、又喜ばしき哉無始の業障を消滅して靈山に參りて敎主釋尊に侍り上らんことよと云ふもの之なり。

上人の追憶

末弟子　日高丙子郎

私ども三塗沈淪の苦衆生を如來の慈光中に引導しようとの大悲願に、三業四威儀のすべてを、彌陀三昧に終始遊ばされた恩師上人の尊い御啓示を追想して、御遷化後十年の今日、懈怠の罪障深重、定中の上人に御心配のみかけ居る私自身を鞭たうと存じます。

御遷化の春二月の中旬頃であつたと存じます、薄雪積つた夕刻、上人は故恒村夫人外一名の女子と、千葉縣方面の御巡教から増上寺山内の多聞室に御歸りになりました私は故渡邊信孝居士と御着を御待受けして居ました。

上人は御留主居の人や私共に、御十念を授けられ、直に三昧佛の御前に、禮拜儀御念佛と二時間ばかりも御勤めになりました。其れから御食事を取られ、箸を置かせら

るゝや御留主中に到着し居る十數通の書面御披見、一々御返事を御認め遊ばし其の中に唐紙を封入して御名號御揮毫を御願せしものには、其れを御認めになりました。私は千葉方面に御出立前に頂きました如來様の表裝が出來て居ましたのを御覽に入れますと、御面相、御眼晴、御衣紋のところ〴〵に御筆を加へられ、更に御名號御揮毫の紙の裁ち出し二枚に、文珠普賢の二菩薩像を認めて御授け下さいました。其の時はもう十時半も過ぎて居たと覺えてゐます。

上人は筆を御置きになるや、

それではこれから出立します。

との仰せでありました。

（東海道清水方面の御別時が翌日からあるのでした。）

其處で私共は、御疲れの處に、此の雪の夜半に御出立遊ばすより、明朝一番になさいましたらいかゞでございます。此の汽車では明朝未明に御着、清水方面との連絡までの時間を停車場で御待ちは御難義でございませうと申上げますと、

（ハッキリ記憶しませんが、其の夜の十一時過の汽車で御立ちになると翌朝四五時の頃靜岡に着其れより、清水方面と連絡ある迄、二三時間も。間があつたと覺えて居ます）

行かるゝ處までは、早く往つて置きませうと仰せられ、二人の御婦人を御伴に、いそ〳〵と御出立遊ばしました。

渡邊居士と私とは、大門前の電車まで御伴致し。御十念の中に御別れ致しました。

明朝早くから老婆に起きさすのもとの御慈悲も勿論籠つて居つた御事とは存じますも、寸分の御やすらひも無く、只一すじに御旨の啓示に御いそしみの御姿が、あり〳〵と拜まれて譬えがたなき尊さの限りでありました。

あらぬ道草に尊い生命を殺して作すべき事を忘り作すべからざる罪を造つて居ます私に、あの一夜の御示現、殊に

行かるゝ處までは往つて置きませうとの御垂誨は、靈山會上の御說法にも勝る難有さと、つく〴〵御慈悲をしのび、一日も早く御心の休まるように努めねばと存じてゐます。

○同じ年の一月十二日頃、上人は當麻を御出立（御隨行は田中先生と私とであつたと記憶致します。）東神奈川慶運寺から横濱の內海氏久賀氏等の御法筵を終へられて御歸京の翌日、雨のそぼ降る夕方、動坂に近藤御老婆を御訪問なさいました。其時上人は老婆のたつて御すゝめ申上ぐるにも拘らず、座敷の椽側の中程よりも下位に着坐せられて御挨拶せられ、それより佛前に進ませられて、禮拜儀御念佛をやゝしばらく遊ばし、終つてかにかく御法問をなさいました。其の折の老婆に對せらるゝ御うるはしい御有樣、何とも尊いきはみに拜せられました。

私が小を得て忽ち有頂天となり、やゝもすれば人を凌ぐ罪障に對する無言の御啓示と信じ、今も思ひ出でゝは御慈悲に胸をとゞろかせてゐます。

○一月の五日に私は當麻で

唱ふれば南無阿彌陀佛となりにけり南無阿彌陀佛〳〵

と認めて御點檢を仰ぎますと、上人は、『ハア左樣で』と大層御よろこびの御樣子で越えて七日には御法號を御授與下さいました。

次で當麻から東神奈川に御伴致しました折、慶運寺樣に到着後。

阿彌陀佛に御伴つかへて極樂の淨土めぐりの札のうち初め

と認めて御覽を仰ぎました。

スルト、上人は、今度も

ハア左樣で

と仰せになりましたが、其の御氣色には、御うけがひにならぬ御樣子が拜せられました。依て私は其の紙片を收めてつく〴〵考案しました末、全く天と地との相違あることを省覺しまして、改めて御覺を仰ぎましたところ、今度は、御にこやかに

ハア左樣で

と御許し遊しました。

其後横濱の御別時の折。

神と行き神と語りて神と寢ぬる其のなかうどよ南無阿彌陀佛

として御點檢を仰ぎますと、今度も同じく

ハア左樣で

と御一言、而も其の御氣色は、今頃何をソンナ世迷ひ言をと、きびしい御憐愍の御樣子に拜せられましたので、恐入つて匆々に其の紙片を撤下致しました。

上人は、禪宗流に申さば、白雲萬々里とか、倒退三千里とか。又は棒や喝や瞋拳やを行ずるところをたゞ、

ハア左樣で

の一語に接得濟度せられました。

勿論法義の不審に對しては、午前の二時までも三時迄も時間等は一切御忘れで御說明を遊ばしましたが

私はバイブルに唯然り〳〵否〳〵といへ、此れより多きは過ぎたるなりと申した甚督の實際を、上人に拜がませていたゞきましたことを感謝し私の無義語を戒めようとつね〴〵念じてゐるのであります。

○上人の當麻にて御說法中、やゝもすれば御傍近くにある御弟子で、御法話に聽き入りつゝいつしか鼾を漏すことがあります。

上人は其れが御眼にも御耳にもとまらぬように、御にこやかに御說法を遊ばしました孔夫子も、我が傍にあぐらをかこうと、寢ころぼうと我れには何んでも無いと申して居られますが、其れも事によりけりで尊い御師匠樣の御說法に、鼾をかくとはと、侍坐する私は他の聽聞者に對してもとハラ〳〵思ひ、其の御弟子の背をつゝき又は頸すじを吹きなどして眼覺めさせましたが、大陽の受くる者も受けぬものも一樣に光被す

るように如來無遮の大慈中に一切を包容し給ひし上人の測り知らぬうるはしい御啓示を追憶して尊さの限りに堪えませぬ。

○上人に御伴して慶運寺樣に御泊り致しました夜。上人は久賀博士への御法話で午前二時過ぎに御就寢に爲りました。私は程經てフト眼が覺めますと、近くの枕元の方に誠にすゞしい御唱名が聞こえます。どなたか徹夜の御念佛と存じながら、次第に氣分がハツキリして來まして耳をとめて伺つて居ますと、其れは御熟睡中の御上人の御寢息であることを承知致しまして、何とも申さうよう無き尊さにうたれました。

田中先生の

寢息自ら名號を呼吸し法輪恒轉途上卓上にも猶ほ說法絕えず三業四威儀佛作佛行一切時一切處片鱗の私を見出すに由無し

と鑽仰せられし事實、敎主世尊と同じく內靈應に充ち給ひし御三昧を初め、孔子基督と等しき御德のかず〴〵を親しく拜ませていたゞきました事を、今生に於ける唯一の勝事とたゞ〳〵感謝して居る次第であります。

○御遷化の夏の頃。御上人は私に

今年一年だけ一しよに廻らぬか

と二三度も仰せになりました。同じ事を重ねては、餘り仰せ無かりし御上人のかく繰返して御勸めなさいました御深意を當時の私は拜する由も無く、又上京して御啓示いたゞけると信じ、間島方面の修羅のちまたに心ひかれて歸滿しました。

其の年の十月には琿春と申す所の領事館は燒討ちせられ同胞の多數慘死し、次で二個旅團の出兵となりました。

其の十二月阿鼻叫喚の中に御遷化の飛電、私は全くボウツとなりました。

思へば私等が賴まれぬものを賴む迷を覺さうとの大慈大悲の現身說法を垂れさせられしものと存じます。爾來一日も早く夢をさまして定中の上人に御許しを得ようと願ひつゝやみの中に又九かへりの御忌に遇ひまして

今年一年だけ〳〵

との御言葉が新に耳にすがつてせめて息ある間に是非にと發願して此の追憶を認めます。

昭和四年十二月廿八日印刷
同　三十日發行
年七冊制は廢止
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區餌釣町五五
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番